

年間第27主日

福音朗読 マルコ 10・2-16

2024.10.6 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音で朗読されている——今日だけではないんですけども、このところ朗読されているマルコの福音書の箇所は、イエス様がエルサレム——神殿のあるエルサレム——の都から離れたガリラヤ地方からエルサレムの都に向かって旅をしている、その旅の途中の出来事が、マルコの福音書では3章にわたって語られているわけですけども、その旅の途中のエピソードということになっているんです。

エルサレムの都から離れたガリラヤ地方からエルサレムの都へ上るこの旅というのは、ただ祭りが近いから、あるいは神殿におまいりするためにイエス様がエルサレムに向かわれるというようなのん気な旅ではないわけです。むしろ、そこでの苦難をご存知の上で行かれる。つまり、都から離れた場所で、イエス様は、ご自分を信じる弟子たちやご自分に従う人たちだけと新しい共同体を造るのか——自分を受け入れる人たちだけと新しいつながりを作るのか、それとも神の民全体を父である神様のみこころに呼び戻すために、神の民の中心であるエルサレム——今日の福音でも登場しました自分に反対する人、自分を迫害する人も含めて——のみんなを迎え入れる共同体に神の民全体を呼ぶのか。その選択の中で、イエス様は、自分たちだけで集まるのではなくて、神の民全体に呼び掛けるためにエルサレムに行くということを決意された。そういう旅の途中であるということなんです。

それをいつも念頭において、わたしたちは旅の途中のエピソードとして書かれたことを読む必要があるわけです。そうでないと、今日の福音でしたらば、イエス様が個別の夫婦間の離婚の問題について見解を示された、あるいは子どもたちにどういう態度を示されたというだけの話になってしまうんです。

そうではない。何かと言え、神様と神の民の関係というのが、夫婦、結婚の関係になぞらえられるし、また父である神、親子の関係になぞらえられる。その神様と神の民の関係を表わす、そのためにイエス様はエルサレムに向かわれるんだ、ということです。そしてその中で、人間同士だったら離縁したり、夫婦の誓いを立てたとしても、それが場合によって相手が相応しくなければ相手から離れるということもあるかもしれない——もちろんカトリック教会は簡単にはそうならないようにと呼び掛けていますけども、でも人間の場合だったらそういうことがあるかもしれない。しかし、神様と神の民の関係は、神の民——人間の側——がいくら相応しくない者であったとしても、神様は離縁しないんだと

いうことを示す、その旅なんだということがテーマです。だから、個別の問題じゃないんです。

イエス様がエルサレムに向かわれる、その神様の姿。だから、「妻を離縁して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。夫を離縁して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる」(マルコ 10・11)というのは、人間の側は神様を離れていろんな他のものをつながろうとする、だけど神様の側はそうではないんだということを示すし、その旅は、イエス様にとっては、反対する者、イエス様をなんとか陥れようとする者たちをも迎え入れるために、その人たちのところに行く旅だから、十字架の道なんです。

でも、その十字架の道を歩むように父である神様が望まれるならば、それを受け取るっていうのが、子どものように神の国を受け入れるということ。だからこれはイエス様ご自身の姿です。

「子ども」って言ったときに、わたしたちは自分の都合のいいイメージで、何もしなくていいとか、そういうことをイメージするけれども、そうではない。それは、保護者が運ぶならどこへでも運ばれていく赤ちゃんです。そして、保護者が与える食べ物を何でも受け取る、そういう状態の赤ちゃんのように、父である神様がお与えになるものは何でも——望まれるところ何処へでも行き、そして与えられるものを何でも受け取る、そういう意味での「子ども」のように、神の国を、神様のみこころを受け入れる者である。

だから、今日の福音は、イエス様が何のために旅をされるのかという理由と、そしてそこへ向かわれる決意を示している、そういう箇所であると言えます。

そして、わたしたちはそのイエス様に呼ばれてついて行くんだというふうに、イエス様について行くように呼ばれたと信じている。それは、イエス様のように、父である神様がそれぞれに与えられる出来事や、与えられる出会いや、また色々な自分自身で選ぶのではないことを、これは嫌だ、あれは嫌だ、と選ぶのではない——これが良い、と受け取っていく、そういう歩みなんだ。でも、それは決して簡単ではない。一度大人になって「選ぶ」ということに目を開かれた者が、再び父である神に信頼して「すべてを受け取ります」という神の子になっていくのはたやすいことではない。それは十字架の道なんです。でも、その十字架を通してこそ、ほんとの恵み、復活へとわたしたちも歩んで、導かれていくと信じる、あるいは自分に絶えず言い聞かせるというのが信仰生活だし、そのためだったらイエス様といつも一緒なんだから助けは与えられるんだという希望を新たにするというのがこのごミサなんではないかなと思います。

わたしたちが、今、それぞれの場で、他の人に対しては、決して神の民を見捨てない神様の姿を自分を通して少しでも表わすことができるように、そしてそのためには、すべての出会いや出来事を神様がお与えになるものとして子として受け取っていくという信仰者としての歩みを、振り返りながら、それは簡単で

はない——それを十分ご存知だけど——でもわたしと行こうと呼ばれているイエス様のその言葉に、招きに信頼して日々の中で神とともに、また神様が与えられる人々や出来事とともに歩んで、まことの恵みに達することができますように、このごミサを通して、イエス様との一致の恵み、そしてそこから与えられる力を願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>